

## 指定討論

### 地域のメンタルヘルス—いま、何を問われているのか—

吉川 武彦

(国立精神・神経センター精神保健研究所)

ご紹介をいただきました国立精神神経センターにおります吉川でございます。昨日の会合の中でも、特に夕方のシンポの最終発言者でありました森山さんが「今年このフォーラムも3回目を迎えて初めてメンタルヘルスを採り上げた」と話されました。これは今日の座長の高岡さんもそうおっしゃっていました。ご両人とも、「メンタルヘルスということを初めて採り上げた」というふうにおっしゃりながら、そのメンタルヘルスを採り上げた理由として、私たちが住んでいる社会が今いかに問題を含んでいるのか、そしてそこに呻吟する市民たちがたくさんいる、その問題を抜きにしては精神障害者のリハビリテーションも考えられないのではないか、こういう文脈でメンタルヘルスの問題を採り上げたというふうにお話しになりました。

私にとりましては、大変勇気づけられる発言をいただいたと思ってまして、今日これからお話をいたしますことも、ここまで私なりに考えてきたもの、それを皆さま方に提示しながら、また今日シンポジストとしてお話しくださいます方々に対するいくつかの質問をまた用意して参りましたのでそれを後ほどお話をしたいと思っております。

私はかねてより昭和20年、敗戦の後から日本は大きく変わったと思っています。ここまではどなたもそう思われるでしょうが、その変わり方のまず第1は農業社会に入ろうとしたことです。しかしそれは農地改革というようなもので

実現しようとしたんですけれども、残念ながら昭和25年の朝鮮戦争が始まって、私たちの国はまさに軍事国へまた舞い戻っていくこととなります。そしてこの軍事を支えるのは工業でありますので、農業国を目指したはずの私たちの国はあっという間に工業国を目指すことになって、急速に発展と言いますか、その方向に突き進むことになりました。こうして戦後もう50年以上経つわけでございますが、その戦後50年という日々は、まさにこの工業化の道であったように思います。この間に、私はこの近代工業化を支えるキーワードは一体何だったのかなあと、こういうふうと考えてきて今4つのキーワードを抜き出しています。

その第1のキーワードは「スピード」であります。何をさておいても速いということがいいこと、スピードアップということを上至命令にしたということ。そして、もう1つは「生産性を上げる」ということでもあります。この生産性の問題は、現在のリストラも皆それにつながるものでありますけれども、こうした生産性向上ということ、大きな目標に挙げてきたことです。3番目は「管理を厳しくした」ということ、すなわち製品の管理、製品がいいものができるようにすることも、それから流通の管理も、あらゆるものに対して目配りがきちっときくような、生産体系を作るということで、管理化が強化されています。そしてその上で大量生産がきくためには、「規格化」をしなければいけません

んし、「画一化」を図るということがありました。これらは私は近代工業化を成功させたという意味では非常に重要なキーワードであったように思いますけれども、実は人間を見る目がこれに完全に重なっています。例えば皆さま方の中でお若い方はまだ、親から言われてばかりの人もいるでしょうし、もう親の世代の方は、自分の子どもに言ってらっしゃるかもしれない言葉として、子どもに対して「早くしろ」とこう言いますよね。「早くしなさい」。これはまさに「スピード(S)」に見合う言葉であります。

「生産性(S)」を上げるということ言えば、これは何でもたくさんやるということがいいことだ、「しっかりやれ」「頑張ってやれ」という言葉をしきりに使います。「しっかりやれ」はどちらかと言うとこれは管理の強化にあたりまして、「自己管理がよくできてないからお前さんは間違えるんだ」とこういうふうに使われます。試験問題をたくさんやる方がいいことだから、「だからやさしい問題からそれに手を付けて、最低ラインだけは確保してから難しい問題をやれ」と言って受験指導をすることもまさに生産性を上げるということと一致しています。難しい問題にチャレンジして、そしてそれに成功した時に自分の中に喜びが生まれる、こういうような喜びを基にしながら人生を歩いていくということを一切否定してしまったような最近の教育、このことが今申し上げたような生産性を上げるということに尽きます。

「管理(K)」を厳しくするという事は、「しっかりしなさい」という言葉で先ほど申しましたが、これは皆さま方の中にもまだ覚えがおありになるかもしれませんが、学校の教室の後ろのところに忘れ物グラフがあったはずで、「忘れ物をするようなのは駄目なんだ。しっかりしてない」というふうにして、忘れ物グ

ラフを作ってその人の自覚を促すという形で、学校教育は自己管理を教えてきたと思います。こうやって並べて見ますと、一番最後にあたる「規格化」とか「画一化(K)」とか「均質化」とか、こういうような意味合いはもう、すぐにおわかりいただけると思います。つまり、私たちが皆同じような人間になってしまったということから見ても、子どもを育てたり、あるいは子どもたちに教育をしたり、あるいは老人に対して私たちがある種の考え方をもつ時に、「皆と同じにしてくれなきゃ困る」というような、そうした意識がはびこっているのはまさにここから出発していると考えてもいいわけです。すなわち、私たちの社会というのは、こうした近代工業化を成功させたのですけれども、そのさせた裏側で人間の見方、育て方というもの、大きくゆがめてしまってきたことは間違いないのです。近代工業化を押し進めてきたキーワードと子育てを歪めてきたキーワードが全く同じ趣旨であったということに驚きをおぼえます。このキーワードこそS/S/K/Kなのです。

さて私はレジュメの中にも書きましたけれども、物事を進めるには、かならず何らかのツールがなければいけないと考えています。何かの道具がなければ物事は進まないのです。そしてそれを、戦術にしなければならぬと思います。どのツールとどのツールを使って戦術を組むかということ、そしてその戦術は、戦略がなければ実際に活用できないといえます。例えば、あのパルーの事件の時に、あの地下道を掘ったのはおそらくシャベルでしょう。それがツールです。どんな近代的な穴を掘るような機械があったとしても、あの狭いところに、そして音をたてないで日本大使館の下までいくことは、ほとんどできません。ですから結局はツールとしてはシャベルを使って、もっこを使ったみたいな

ものだと思います。ツールが古ぼけているから、ツールが新しい機械ではないから、戦術がうまくいかないということではなくて、どのツールをどれだけ使って、そして組み合わせで戦いに臨むかということを考えなければ、本当に戦争には勝てないと私は思っています。

地域の中のメンタルヘルスの問題を、こうした戦争というものに例えることは不謹慎であることは、私自身も十分承知しています。しかしながら今私たちの社会の中で、地域でのメンタルヘルスを考える時にツールを組み合わせ、戦術を立てて戦略を練る戦争というものを、どこかに頭の中におきながら、そこと戦いながら、どういうふうに分たちの考え方を広げていかなければいけないのかということを私は考えてしまいます。それでこのツールの問題、戦術の問題、そして戦略の問題、これを冒頭に挙げさせていただきました。コミュニティメンタルヘルス、これが今直面している問題は、今日のシンポジストの方々から、すべて提示されたと思っています。

従いまして、私がここで抄録の2（コミュニティメンタルヘルスが直面する課題）として挙げましたことは、省かせていただきます。ただ、今あまりお話が出てこなかったのは、知恵おくれの方々や肢体不自由の方々、最近流に言えば、知的障害者、身体障害者、自閉症、さまざまなハンディキャップをもった子どもたちがおられるわけですが、そうした問題をもった人たちを個別にケアをするという点ではお話がありましたけれども、ではそれをシステムでどうケアをするのか、そのシステムケアの方法についてはあまり議論が生まれませんでした。

私は物事を進めていくのに個から出発するやり方、そしてもう1つはその対極にある一般大衆から、あるいは公衆から始める方法と大きく

2つに別れるような気がします。そのどちらも1人1人の個が住みやすくなること、生きやすくなることを求めていますけれども、個から出発するというのはどうしても問題行動をなんとか少なくしようとか、あるいは問題行動を自分の問題としてよく自覚してもらおうとか、あるいは問題行動を周りに認めてもらうようにしようとかという個の視点から物が始まります。私はもちろんそれを否定しているわけではありません。さっき申しましたが、こうして個の問題から出発するというのも1つの方法です。けれども、こういう問題を抱えた子どもたちを出さないようにする、生まれさせないようにするという、逆に言えば仮に障害児なんかでいえば、障害をもつということはいくらでもあり得ることであって、障害をもたないような子どもを育てるというのではなくて、障害をもつていても生きられる社会を作るという、大きな衆の問題からこの視点を持ちたいと思っています。

次に移らせていただきますが、「コミュニティメンタルヘルスの戦略と戦術」として、私自身がそれを具体的にどのように考えてきたかということを中心にまとめておきました。中でもこの準備のための会合で指摘していただいたことがあるんですが、「住民を巻き込む」という言葉を私が抄録で使ったことに対して、「それは住民の方に主体がないということを行っているのではないか」とご注意を受けました。すなわち、我々が住民を巻き込んでいくというふうには受け取られるけれども、これはどうだろうかというのです。こんな疑問が私のところに寄せられました。その前後の文脈を読んでいただくとわかると思いますけれども、少なくとも今の時点で、すなわちここまで個がばらばらになってきた時点で、何とかしなければこの市民社

会は変わっていかないと考えています。市民社会が変わっていくためには、個を何とか集めていかなければいけないわけですが、その集めていく人が誰かいないければ、あるいは集めていくための思想がなければいけないだろうと思います。そういう意味で私は、「住民を巻き込む」という表現をしたわけでした。ただし、巻き込まれた住民たちが主体を取り戻せば、住民を巻き込んだ専門集団とされている人たちは、もう御用ずみです。御用ずみになったものは、1市民に戻ればいいということです。

住民を巻き込むというのは、いわばある時点の問題として捉えていただければと思っています。私たちは住民とともに、ネットワークを作っていかなければいけないし、そのネットワークには、3つのものが用意されなければいけないと考えます。一番大切なのは住民の中におけるネットワークです。しかし、住民だけでネットワークを組んでも、例えば法律的な事項であれ、あるいは医療とか保健とかそれぞれの専門的な知識であれ、それらをもっている人たちがすべて含まれているわけではありません。とすれば、こうした専門的な経験や知識をもっている人たちの間にもネットワークができていかなければいけないわけです。あるいは、地域社会の中にはいろいろと組織もありますから、その組織の人たちが集まっていくネットワークも必要でしょう。すなわち最低でも地域社会の中のネットワークは、3重に広がっている必要があると私は考えています。こうしたことに、だれを、どのような形で、この考え方にまず入れていくかということが重要です。その時点では入れるという考え方をとらざるを得ないでしょう。だけでも、もし、それぞれのネットワークが自分たちで機能できるようになれば、それが最も望ましいものだと思います。ベーシッ

ク・ネットワークというのが、地域の中における基本であることは間違いありません。

さて、先ほど「ではこれからどういうふうにしたらいいのか」というお話の中で、「これからは精神保健福祉センターであるとか、保健所というところが一定の機能を果していくべきではないだろうか」というお話が出ました。現在の精神保健福祉センターや保健所、あるいは市町村の保健センターというところに期待することは、大変私自身にすればありがたいという表現をとるべきなんだろうと思いますが、それらに期待することはできないわけではありませんけれども、現実的ではないように思います。なぜならば、こうしたセンター等におられる方々の住民に接する態度、あるいは接する姿勢というのは、ほとんどが『垂直指導型』と私が名付けているタイプだからです。「自分たちは経験が豊富で専門家であって、専門的でない人に対していろいろと指導してさしあげよう」という姿勢がベースになっているからです。これでは住民にとってはたまらないのです。それで私は、これからの地域保健というものは、垂直関係から水平関係に移らなければいけないと唱えてきました。『水平相談型』という名前を付けています。どこまで変わりうるかが、まず問われているのです。これらはかつて自分の保健所実践の中でもやってきたつもりです。こうして私たちが考えなければいけないことはいくつもあるわけですが、このような地域社会の中で私たちが本当にメンタルヘルスを広げていくために、いくつかの言葉だけをさしあげておきます。

私たちは、子どもたちを育てる時に迷惑をかけないようにしようと、こういう話をしますけれども、お互いに迷惑をかけあいながら生きていくという社会を作っていけばいいのじゃないかと思っています。ビー玉のように、丸っこく

なってチンマリ生きているのでは、他人と接する時は球と球の接点である1点でしか接することができません。ビー玉の集団になるのではなく、お互いが石ころ同士で、面と面がすれあって生きていきたいものです。ときには熱をもつかもしれないけれども、私たち自身は、ビー玉ではない石ころの世の中を作っていこうかと考えています。室伏さんが先ほど「キュアからケアへ」という展開があったと話されまし

たけれども、私は地域の中のメンタルヘルスを考える時には、それでは足りないような気がします。たしかにキュアもケアも大切です。けれども、お互いにわかちあうというシェアの考え方がなければ、社会というものは維持できないような気がしています。こんな言葉をちょっとさしあげておいた上で、後のまた討論に臨みたいと思います。ご清聴ありがとうございました。